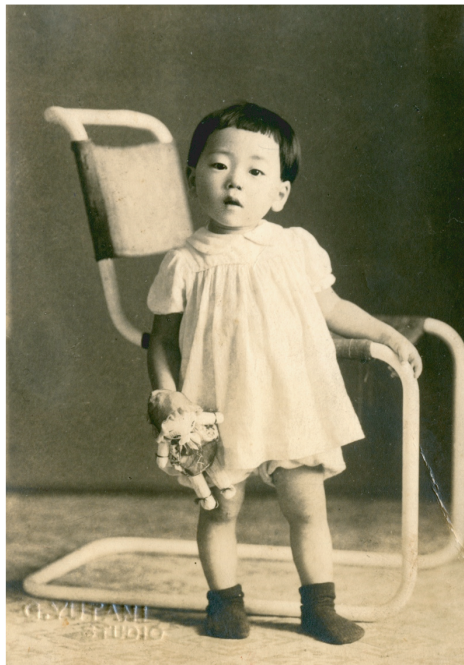


皆さん 冬がやってきました。風の音に寒さが交じります。先日、親の会の交流会がありました。参加された方が少なかったのですが、楽しい時間を過ごさせてもらいました。その中で、私の小さく幼い時のことを話したところ、ばら通信で紹介してほしいと言われました。自分史を語るのは語り得ぬ多くを持っている身としては難しく恥ずかしいのですが、その全てを経て、現在の自分があるのですから一部分でも紹介できればと思いました。

私は昭和21年（1946年）9月29日に秋田県雄勝郡東成瀬村田子内字滝ノ沢下村に生まれました。母は村の産婆で保健婦で、後に大きな病院の看護婦（職名当時）もしました。父は同じ村の小学校の教師でした。祖父は無骨だが、腕のいいお百姓で無口な人でした。祖母（子どもができず、祖母の姉の子どもだった母を養子にもらった。）は着物を縫うのが上手で、村の若い女子に裁縫教室を開いて裁縫を教えていました。祖母は女の子がほしかったとのこと。自分の縫った着物を着せたかったためなのかは今では知る由もありません。しかし、男の子の私が生まれてしまいました。どうしても着せたかった。ここに小さな女の子の写真が誕生したのです。私は全く記憶がのこっていません。

祖母は私を大変かわいがってくれました。私が母に叱られ、暗い倉の中に閉じ込められた時も、かわりに謝ってくれたりしました。その祖母は、私が小学一年生のとき、脳血管障害で倒れました。祖母は、倒れた後、ことばや身体が不自由になり、私はそうした祖母を受け入れることができず、よい孫ではなくなり、かわいくもない愚かな子どもになったのです。祖母は、何度かの再発で、私が中学一年生のとき、学校から帰ったらひそやかに亡くなっていました。



倒れ、不自由ながら家事をこなしていた時の祖母の気持ちに、今、時々思いをめぐらします。心の底から胸が締めつけられます。私は長い時間をかけて、祖母の心に近づこうとしてきました。料理の上手だった祖母のレシピは、私の記憶の中にあり、時々記憶をたぐりよせながら作ります。たらの芽をみじんにきざみ、みそ汁にぱっと放す。笹タケノコを酒粕であえてみそ汁蒸しにする等々。私が作ってもおいしいのですが、それでもどうしても子どもの時に食べた祖母の味をうまく出せず、かすかなそれらしきものでしかありません。

祖母を今思う時、どうしても人間には取り返しのつかない時間があることを私に教えてくれます。

